

【第17回年次大会 パネル・ディスカッション：文化テキストとジェンダー 要旨】

「語る女」の文体と「近代」
——清水紫琴の「こわれ指環」をめぐって

斎藤理香

「近代」化は、それと対立する「前近代」を生み出し、社会のあらゆる分野における「ジェンダー」化をうながした。この場合のジェンダー化とは、江戸時代から明治時代にかけて社会構造が変革され、士農工商の身分制度が崩壊し、建前の「平等」が浸透しつつある世の中において、新たな秩序が台頭してきた、ということを示している。さらに言うと、女性が「国民国家 nation state」の一員となりながらも、男性とは区別され、二線級の地位に甘んじなければならなかったことを意味している。

ジェンダー化の影響から逃れられなかったのは、日本語の文字と文体、主題やその描写法の近代化によって成立した「近代日本文学」もまた例外ではない。まず近代以降、「国民国家」固有の文字は音声文字であるひらがなであるとされ、そのひらがなを使った平安文学が、古典として持ち上げられた。学者たちは、「日本文学史」を書き、「近代日本文学」が古代の『万葉集』や『源氏物語』という古典文学の伝統をもち、それを継承するものであることを証明しようとしたが、彼らは、ひらがなを媒体とした平安文学が、女性作者によって書かれたゆえに、その身にまとうこととなった女性性 femininity を排除することに腐心した。また、同時代の文学には音声文字と話しことばを主体とした文体である言文一致体を求め、作家も、近代的な文体を完成させるための試行錯誤を繰り返した。この近代日本文学成立のプロセスから、女性（作家）は基本的に締め出されてしまった。

このような近代日本文学の成り立ちを背景に、ジェンダーをめぐる問題を女性作家の作品の中に探っていこうというのが、本発表の主旨であった。前述したように、女性性を排除しながら発展した近代日本文学の中で、女性の書き手が編み出したものがあるとすれば、それは「語り」による自己表現だといえる。言い換えれば、「女性一人称」（関 1997；平田 2001）の文体による女性の声（ヴォイス）の創出である。

女性が自身の「語る」行為を可能にするためにまず取り組んだのは、自分たちの文体を模索することだった。樋口一葉（1872-1896）は、男性作家の目から見て女性らしい、女性にふさわしい文体、いわゆる「女装文体」を身につけるようにという創作の師匠からの助言を実践に移す過程で、結果として、女性性の枠に押し込められようとする女性の声（ヴォイス）を描き出すに至った（Saito 2010）。そんな一葉の用いた文体の一つが「女性一人称」であり、近代文学の文体に限りなく近い口語体であった。ちなみに、その作品「この子」（1896）は、一葉による唯一の口語体小説である。

一葉に先だって女性一人称の作品を発表したのが、清水紫琴（1868-1933）である。平田（1999）によれば、紫琴の小説「こわれ指環」（1891）は、女性一人称の語り手「私」が、語りかけの対象をある程度具体的に想定して「あなた」と呼びかけ、さらにこの作品中の「あなた」の外側にいる読者、当時の若い女性たちへも語りかける、そういうテキストとして読めるという。紫琴は、口語体の女性一人称による「こわれ指環」のあと、男性（声）の一人称作品「一青年異様の述懐」（1892）も書いているが、この文体は文語体である。笹淵（1968）は、これら女性一人称と男性一人称の告白体の文体が口語対文語というように対比できることを指摘しながら、女性一人称が

どうして口語体であったのかまでは詳しく論じていない。しかし、「こわれ指環」が口語体の女性一人称の語りというスタイルで書かれたことは、その後も北田 (2007) などに取り上げたように、フェミニズム文学批評の分野で注目されてきた。

本発表では、「こわれ指環」をフェミニスト文学の文脈で分析し、特に近代日本文学のジェンダー化された文体のもつ制約と共に可能性にも目を向けるべく、今後の研究の方向性も示唆した。

[参考文献]

北田幸恵 (2007) 「女の〈私語り〉——『こわれ指環』『書く女たち：江戸から明治のメディア、文学、ジェンダーを読む』学藝書林、157-180.

笹淵友一 (1968) 「こわれ指輪・一青年異様の述懐〈清水紫琴〉——その浪漫性——」『国文学 解釈と教材の研究』13(5), 27-32.

清水紫琴 (1891[1983]) 「こわれ指環」『清水紫琴全集』草土文化

関礼子 (1997) 『語る女たちの時代——一葉と明治女性表現』新曜社.

平田由美 (2001) 『女性表現の明治史——樋口一葉以前』岩波書店.

Saito, Rika (2010) “Writing in Female Drag: Gendered Literature and a Woman’s Voice.” *Japanese Language and Literature*. No. 2, Vol. 44 (Fall 2010): 149-177.

(さいとう りか・ウェスタンミシガン大学准教授)